

編集後記

暖かい冬でしたが、二月末になって寒さが戻ったようです。しかし春はもうそこまで来ています。近代史の特集をめざして原稿をお願いしてまいりましたところ、少し量が多くなっています。発行も予定より遅くなり恐縮しています。

近代史部門の論文の少なかった本県地方史に、市町村役場の文書に、「太政類典」などの国立公文書館の史料を扱った論文をのせることができました。まず末広利人氏の「臼杵藩の解体」は明治維新期における諸藩の対応の中で、小藩臼杵の苦悩を根本史料を駆使されて浮きほりにされた研究であり、さらに加藤泰信氏の「明治初期における地方行政制度」は、廃藩置県から明治十年頃までの中央集権化の進む中で、地方行政の動きを中央の史料をとりいれて研究されたもので、ともに近代史の出発点を解明するすぐれた論考である。

前号に引き続き安部弥右衛門氏の「羽出浦の歴史と民俗」を紹介します。近代化の進む県南の漁村の明治から現代にいたる交通・運輸から、墓制・宗教の変遷を民俗的に調査した貴重な研究である。

なお、校正にあたっては大分県総務課の県史編纂室の先生方のお世話になったことを厚く御礼申し上げます。

(吉田記)